「にごりえ」と小町説話

堀部功夫

「にごりえ」（明治二八年九月二〇日刊『文藝倶樂部』〔第一巻〕第九編）は、「たけくらべ」とともに樋口一葉の代表的小説である。けれども、難解なところが多く、研究者により読みを異にする箇所も少なくない。

そのような問題点をもつ「にごりえ」を読解する一つの試みとして、「にごりえ」と小町説話との関係を考察してみたい。

I

小野小町は〈①六歌仙の一人に数えられるほど優秀な歌人であった〉ということのほか、説話によれば〈②絶世の美人であり ③多くの男性から求められたが、強く男を拒み、深草の少将を百夜も通わせたと伝える一方 ④かなりの色好みであり、ずいぶん多くの男性と関係したともいわれる ⑤だが、その華やかな生活も、年老いるとともに傾き、晩年はまことはあわれな様で諸国をさすらい歩き、老醜をさらした*〉という。

*片桐洋一『小野小町追跡』（昭50・4・5、笠間書院）P134の記述を借りる。

一葉は、小町説話を「にごりえ」の中に取り入れた。*箇条書に書き出してみる。

*はやく松坂俊夫に〈一葉は、「お力」という人名を、この歌舞伎作品〔「名歌徳三舛玉垣」〕から得ると同時に、その人物の境遇〔土器師丸太夫娘お力、後に良実の養女小野小町〕、ひいては構想の一部をもとり入れることによって、「にごりえ」の世界を展開させていったものと思う。[14]〉との卓見があった（ただし、一葉自身の耳目が直接この歌舞伎にまで達していたか否かは未詳）。橋本威も〈〈お力―小野小町―一葉〉という三重の重ね合わせ[29]〉を示唆している。

① 小町説話　美女。

「にごりえ」　お力は、新開地の銘酒屋＝実は私娼窟*・菊の井の一枚看板である。

年は隨一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しがらせを言ふやうにもなく我まゝ至極の身の振舞、少し容貌の自慢かと思へば小面が憎くいと蔭口いふ朋輩もあり〈容貌よ〔し〕〉〈別品さむ〉である。

＊〈伝統的歌舞演劇に屢々見られる〉〈遊女某実は小野小町〉類の人物設定（橋本威㉓）が、あるいはさらに〝倡家之子〟〝玉造小町〟のそれとの関連が想起される。

② 小町　**六歌仙の一人。**

『にごりえ』　お力は、呼入れた客・結城朝之助から〈素性が言へずば目的でもいへ〉と言い立てられて

いふたら貴君びつくりなさりましよ天下を望む大伴の黒主＊とは私が事

とはぐらかす。大伴黒主が六歌仙の一人であること、言うまでもない。

＊常磐津「積恋雪関扉」に拠る台詞（長谷川時雨㉒ほか）。

③ 小町説話　**驕慢。**

『にごりえ』　〈氣位が高い〉お力は、朝之助に帰りがけ

九十九夜の辛棒をなさりませ＊

という。独身の朝之助は、お力に通い始める。

＊長谷川時雨㉒ほか諸註、この台詞が小町説話をふまえていることを指摘し、藤井公明㉗は典拠として流行歌「とつちりとん」の一節等を示す。して

いる。

④ 小町説話　**好色。**

『にごりえ』　お力に入れ揚げた馴染客にもと蒲團やの源七がいる。〈夫れにお前は何うして逆上せた〉と朝之助から問われたお力は、

大方逆上性なのでござんせう、貴君の事をも此頃は夢に見ない夜はござんせぬ、

とこたえ、後日朝之助には

そも〳〵の最初から私は貴君が好きで好きで、一日お目にかゝらねば戀しいほどなれど、奥様にと言ふて下されたら何うでござんしよか、持たれるは嫌なり他處ながらは慕はしゝ、一ト口に言はれたら浮氣者でござんせう、

と告白している。〈女人の多情あるいは娼婦性〉が指摘される（関良一⑥）箇所である。＊

＊このてんに注目し、「にごりえ」を「好色一代女」と関連させて把握することも可能かも知れないが、今は「好色一代女」の一源流もまた小町説話につながることを指摘するに止める。

⑤ 小町説話　**不幸な最期。**

『にごりえ』　妻子から見放され思いつめた源七は、お力と心中する。＊死の真相はだれも知らない。

＊〈まだ盆提燈のかげ薄淋しき頃〉〈お寺の山で〉といった抹香臭い背

景は、卒都婆小町の image と結びつく。死後も〈串談〉の種にされ〈諸説みだれて取止めたる事なけれど、恨は長し人魂か何かしらず筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き處より、折ふし飛べるを見し者ありと傳へぬ〉と結ばれるお力の無惨な最期は、野ざらしの髑髏になってなおその空洞の眼窩から生え出た薄のために〝あなめあなめ〟と呻きつづけなければならなかった小町の末路を連想させるようだが、恣意的にすぎるか。

なお、小町説話は、このほか「にごりえ」に関係深い作品にも織り込まれている。

参考1 「無題五」の孤児・お初が、「にごりえ」に関係深い作品にも織り込まれている。

参考2 「無題五」の孤児・お初が、「にごりえ」の〈親もなし兄弟もなし、差配の伯父さんを仲人なり里なりに立てゝ來た者〉お初＝源七の女房　へと展開したと推定される（松坂俊夫）[17]。その「無題五」のお初は、

哀れなるは初が身の上なり、誠の父は何物ともしらねど、新宿のかし座敷に端女郎をつとめし小町といへるが色おとろへて客足今はと絶はつるころ、其胎内にやどり來て因果の種と□はれし揚句、生れ落ちて七夜のよに母はあのよの物に成りぬ、

とあるように、娼妓小町の遺児であった。〈小町〉は源氏名だが〈色おとろへて〉の設定からして小町説話をふまえている。

参考2 「にごりえ」で書こうとした遺伝の問題に一葉が正面からとりくんだのは「われから」である（関良一）[18]。

その「われから」の主人公で、美尾の娘は、小町にちなんでお町と名付けられる。

七夜の、枕直しの、宮參りの、唯あわたゞしうて過ぎぬ、子の名は紙へ書きつけて産土神の前に神鬮の樣にして引けば、常磐のまつ、たけ、蓬萊の、つる、かめ、夫れ等は探ぐりも當てずして、與四郎が假の筆ずさびに、此樣な名も呼よい物と書いて入れたる町といふをば引出しぬ、女は容貌の好きにこそ諸人の愛を受けて果報この上も無き物なれ、小野の夫れならねどお町は美くしい名と家内いさみて、町や、町や、と手から手へ渡りぬ。

「にごりえ」と「われから」とについて言及すべきてんは多いが、ここではたゞ小町説話の関連を言うのにとどめておく。

以上、小町説話と照らして「にごりえ」の梗概をみ、関連作*にふれた**。

* 本来はより広く、小町と一葉との関係を精査――藤井公明[17]が、小野小町の歌をふまえた一葉小説の章句語彙四箇所を報告しているように――考察して前提とすべきであるが、至らなかった。倉卒の管見に入った〈小町〉の用例を挙げておく。

○〔おたか〕今年二八のつぼみの花色ゆたかにして匂濃やかに天晴れ當代の小町衣通ひめ（「別れ霜」）

○小町が色を衒らふ島田髷の寫眞鏡（「經つくる」）

○浮世に鏡といふ物のなくば、我が妍きも醜きも知らで、分に安じたる思ひ、九尺二間に楊貴妃小町を隠くして、美色の前だれ掛奥床しうて過ぎぬべし（「われから」）

日記には

○世の中のあだなる富貴榮譽うれはしく捐てゝ、小町の末我やりて見たく（「しのぶぐさ」明25・9・1）

といった興味津々の記事もある。

＊＊これも本来は、こういう関係の背後にある、小町説話・能楽小町物の同時代的影響に注意して前提とすべきであるが、果たさなかった。管見分は取り敢えず次のとおり。

著作者	題名	刊年月日	掲載誌名	巻号
無名氏	九十九の嫗	明24・1・3	国民之友	105附
梅花道人	玉造小町子壮衰書といふものを柵草紙に出すにつきて	24・4・25	文学評論志可らミ草紙	19
藤村	野末ものがたり〔・小町物狂ひ〕	27・2・28	文学界	14
透谷	髑髏舞	27・5・30	文学界	17

この〈無名氏〉とは一葉の「しのぶぐさ」（明25・8・17）に「梅花道人の発狂したりといふ」とみえる中西梅花のこと。

一葉は同誌同号に執筆。「野末ものがたり」と「卒都婆小町」との関係は笹淵友一⑫P931～933にくわしい。

「髑髏舞」と「卒都婆小町」との関係は橋詰静子「地中に潜むもの」（昭51・2・1『国文学研究』58）にくわしい。

その他、露伴「対髑髏」・孤蝶「破三味線」も関連があるかも知れない。

Ⅱ

次に、「にごりえ」の問題点を小町説話の一視角から追求してみよう。

第一例。〈丸木橋〉

七月十六日の夜〔略〕力ちやんは何うした心意氣を聞かせないか、やった〳〵と責められるに、お名はさゝねど此坐の中にと普通の嬉しがらせを言つて、やんや〳〵と喜ばれる中から、我戀は細谷川の丸木橋わたるにや怕し渡らねばと謳ひかけしが、何をか思ひ出したやうにあゝ私は一寸失禮をします、御免なさいよとて三味線を置いて立つ〔略〕お力は一散に家を出て、行かれる物なら此まゝに唐天竺の果までも行つて仕舞たい、あゝ嫌だ嫌だ嫌だ、〔横町の闇に立ちどまれば〕渡るにや怕し渡らねばと自分の謳ひし聲を其まゝ何處ともなく響いて來るに、仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずばなるまい、父さんも踏かへして落てお仕舞なされ、祖父さんも同じ事であつたといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば爲る丈の事はしなければ死んでも死なれぬのであらう、情ないとても誰れも哀れと思ふてくれる人はあるま

じく、悲しいと言へば商賣がらを嫌ふかと一トロに言はれて仕舞、ゑゝ何うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかう、

大方の称讃を得た第五章の一節である。

しかし、〈私も丸木橋をば渡らずばなるまい〉の意味など、先学の度々の言及*にもかかわらず、なおその解釈は落ち着いていない。

*お力の独白について、関良一は〈謎のようなことども〉と評している。[16]〈謎〉めいたお力の言葉・〈丸木橋〉を解明する案として

○〈前出〔中座時〕の丸木橋は酌婦お力と人間お力の間にかけられたものであり、後出〔幻聴後〕の丸木橋は、人間となることを諦めたお力が、再び泥沼におち入るために渡る戻り橋なのである。〉（塚田満江[17]）

○〈現実から理想の世界へと渡る方法のことであり、生命を賭けた手段のことである。〔略〕お力にとって「丸木橋」はこの遊里を出る手段そのもの〉（川淵芙美[18]）

○〈嫌な、がまんならない現実〔略〕から脱出して理想へと向かうこと〉（浜本春江[21]）

○〈菊の井の生活空間から、〔略〕虚の空間、死の空間へと架けられた橋〉（前田愛[25]）

等の解に接したが、依然その内容は茫漠としている。

長谷川時雨[2]ほか諸註、お力が謳いかけた端唄の全文として〈わが恋は細谷川の丸木橋、わたるにや怕し、渡らねば、おもふお方に逢はりやせぬ〉を示す（小異はあるが、今は藤井公明[7]に拠る）。

長谷川時雨は、さらにその原歌が通盛歌であることを示し、より親切な註釈書[8][9]は、それが『平家物語』巻九「小宰相身投」に出ていることを教えてくれる。

ところが、その原歌にまつわって小町説話が語られていることに注意する人はなかったようだ。

そこで『平家物語*』を瞥見する。

*ただし、「につ記」（明25・9・27）に〈師君のもとに平家もの語持参〉とみえ、藤井公明「樋口則義、一葉の蔵書」（昭31・6・〔20〕、『一葉』7）にある「平家物語十二冊」を未調査なので、今は『日本文学全書第廿編』の小中村義象・萩野由之・落合直文校「平家物語」（明24・11・12、博文館）に拠る。

通盛が上西門院の女房・宮中一の美人小宰相を見染め、恋文をしげしげと送ったけれども、受け入れの様子はない。こうして三年、通盛は今度限り最後のつもりの文を小宰相の許へ送った。小宰相はこれを手にしたが、女院の御前で落としてしまう。二人の仲をお気付きの女院は、その文を開けて御覧になると奥に一首の歌がしたゝめてあった。

我戀はほそ谷川のまろきばしふみかへされてぬるゝそでかな

女院、是は逢はぬを恨みたる文なり。餘に人の心強きも、中々今はあだとなんなるものを、中頃小野小町とて、みめかたち美しう、情の道ありがたかりしかば、見る人聞く者、肝魂を痛ましめずといふことなし。されども心つよき名をや取りたりけん、終には人のおもひの積りて、風を防ぐたよりもなく、雨を洩さぬわざもなし。宿に曇らぬ月星は、涙に浮び、野邊の若菜澤の根芹をつみてこそ、露の命をば過しけれ。女院、是はいかにも返事あるべきことぞとて、御硯を召しよせて、忝くも自ら御返事遊ばされけり。

たゝたのめ細谷川のまろ木ばしふみかへしてはおちざらめやは

――云々とある。

「にごりえ」にもどれば、〈父さんも踏かへして落てお仕舞なされ〉というお力の独白（傍点引用者）は、用語からして『平家物語』に拠っている。

だとすれば、お力の物思いに小町の影がまたひとつ落ちていると推測することも、あながち不自然ではあるまい。

お力の謳う端歌で〈丸木橋〉は、一面では自分を非常な幸福に導く通路だが、他面自分に大害を与える危険性をはらんだもののたとえである。

この〈丸木橋〉は、とりも直さず、小町の男えらびにおける完全癖・気位の高さと見ることができるのではなかろうか。〈餘に人の心強きも、中々今はあだとなんなるものを〉というごとく、小町は高望のあまり、一般の男を拒絶しとおしたが、それが裏目に出て晩年を一層悲惨に送ったのであったから。

このような〈完全主義〉（松下道夫）[27]・気位の高さは、お力においても〈丸木橋〉だったはずである。

お力は〈平凡な結婚生活を擇ぶことに、女の幸福を見出すことのできないタイプ〉（山本健吉）[15]の女である。このことは、お力自身、〈これでも折ふしは世間さま並の事を思ふて恥かしい事つらい事情ない事とも思はれるも寧九尺二間でも極まつた良人といふに添うて身を固めようと考へる事もござんすけれど、夫れが私は出來ませぬ、夫れかと言つて來るほどのお人に無愛想もなりがたく、可愛いの、いとしいの、見初ましたのと出鱈目のお世辭をも言はねばならず、数の中には眞にうけて此樣な厄種を女房にと言ふて下さる方もある、持たれたら嬉しいか、添うたら本望か、夫れが私は分りませぬ〉との述懐（傍点引用者）に明らかだ。朋輩もお力を評して〈お前は氣位が高いから源さんと一處にならうとは思ふまい〉と言っている（傍点引用者）。

「にごりえ」本文の〈矢張り私も丸木橋をば渡らずばなるまい〉

は、おそらく〝父・祖父と同様に私も気位高く驕慢の性に身をまかさないではおさまるまい〟の意。

すぐれた職人だった、お力の父も〈氣位たかくて人愛のなければ贔負にしてくれる人もなく〉極貧・無名の生活に埋もれ、〈お上〉に楯突いた気丈の祖父も〈終は人の物笑ひに今では名を知る人もなし〉になってしまった。かゝる父祖代々の遺念で自分も〈氣位が高〉く平凡な安定に甘んじることはできないとお力は意識しているのだ。

その時、〈氣位が高〉くなければ感ぜずにすんだはずの悲哀が、お力をからめとる。そのいわば選ばれた（と主観する）ものゝ〈かなし〉さを、お力は吐き出すことにもなるのだけれど。

第二例。**お力の〈思ふ事〉**

〈貴君は私に思ふ事があるだらうと察して居て下さるから嬉しいけれど、よもや私が何をおもふか夫れこそはお分りに成りますまい〉と言っていたお力が朝之助に〈申ますから驚いてはいけませぬ〉〈今夜は殘らず言ひまする〉と予告して、三代の悲運を語り出す。

お力が七歳の冬、なけなしの金で買いに行った米を溝に落とし、空の味噌こしさげて呆然と立ちすくんでいた――〈私は其頃から氣が狂つたのでござんす、〉という。

〈いひさして〉お力は涙にむせぶ。

〈私は其樣な貧乏人の娘、氣違ひは親ゆづりで折ふし起るのでござります、〉

名人だとて上手だとて私等が家のやうに生れついたは何にもなる事は出來ないので御座んせう、我身の上にも知れまするとて物思はしき風情、お前は出世を望むなと突然に朝之助に言はれて、ゑッと驚きし樣子……

先学のよく引用する重要な箇所であるにもかゝわらず、問題が多い。代表的疑問を引こう。和田芳恵[18]は〈「にごりえ」の中で、はっきりしないのは、朝之助へ生いたちを語る中で、「私は其頃から気が狂ったのでござんす」と「お前は出世を望むなと突然に朝之助に言はれてゑッと驚きし樣子」の、（六）の中の会話の唐突さにある。いくら冷静に読んでも、木に竹をついだようで、この心理経過を知ることはできない。〉といっている。

そこで、先学諸説に学んで一解を編む。

まず、お力が〈氣が狂った〉〈氣違ひ〉といっている点。

予断*なく読めば、これはお力の〈思ふ事〉の著しく常軌を逸していることを指す言葉であろう。

＊〈氣違ひは親ゆずり〉を一葉周辺の伝記的現象と結びつけて、病理的に解する見方[16]が有力である。けれども、蒲生芳郎[29]がいうように、「にごりえ」本文の表現だけに拠っていうならば、〈氣違ひ〉なり遺伝なりは、精神的なものとみるべきではないか。すでに笹淵友一[18]に〈お力の気位の高さも親譲り〉の言があり、川淵美美[30]も〈遺伝〉は〈病理的なものというより精神的なものである〉とことわっていた。

〈親ゆづり〉の〈氣違ひ〉とは、求めて得られぬ気位の高さの充足をさらに求めようとする、父祖から受け継いだ心の有様をいうと思われる。

次に、朝之助の台詞〈お前は出世を望むな〉*の解。

朝之助のいう〈出世〉は、〈泥水稼業からぬけ出して人並の暮らしをすること〉（関良一[31]）ではなくて〈一足とびに〉、〈人並の暮らし〉をしている人々からも羨望の的となる〈玉の輿〉に乗ることであろう。

＊その他、朝之助のいう〈望むな〉の〈な〉を、〈否定の終助詞にとる人もあるが、やはり、後の文章から、感嘆の終助詞と見るべきものと思われる〉（和田芳恵[32]）し、〈お力が「えッと驚」いたのは朝之助にいわば図星を指されたからであり、少なくとも彼女の胸中の秘密の一端に触れられたからであることは疑いない〉（岡保生[33]）ところであろう。

お力の望みは、人並みに生きることではない。本文のお力の述懐に〈夫れが私は出來ませぬ〉とあるのだから。

お力は、自分が一躍〈氏なくて玉の馬車〉（「無題三二」）に乗る場面の空想にふけるときがあった*のだろうと思われる。

＊〈お力が、玉の輿を望んでいたとは思えない〉とする反論が浜本春江[34]にある。理由は〈結城と結婚して玉の輿に乗る事が、お力の望みであるかのようであったが、お力は、「奥様にしてくれ」とも言っていないのである〉からという。しかし、草稿中の

○何で結城さんがゑらい人であらう、かしこい人であらう、つい一とほりの男一人、あのこすさうな眼つきをおもふても素性は何であらうか知れた物ではなし、つまらぬくだらぬ馬鹿〳〵しい（「無題二十二」）

○お力はいかで〔結城〕道雄の妻にて 満足のし 得らるべき（「無題二十三」）

を参考にすれば、お力は馴染の結城との結婚を、自分の気位の高さが満たされる〈玉の輿〉とは考えていなかったと見ることもできる。したがって、結城に結婚を願っていないからといって、お力が〈玉の輿〉を望んでいないとまで決めつけるのは、早計である。

そして、このような破格の出世願望も小町説話の影響を考えるならば、必ずしも〈唐突〉ではない。説話の小町は〝女御・后に心をかけ〟〝よろづの男をば、いやしくのみ思ひくだし〟ていたのであったから。

以上、小町説話の投影関係からお力像を考えたが、転じて次には〈鋳型に入った女でござんせぬ〉と自らいうお力の独自な面・「にごりえ」の創意展開をうかがってみよう。

Ⅲ

今、お力が〈一足とびに玉の輿〉＝〈出世を望〉んでいると読んだ。

だが、しかし、〈お力の心で求めて居るものがあったとするならば、それは單なる出世即ち金持とか、高官とかの妻になること、唯物質的富裕な位地に納ることだけであつたであらうか。お力は、〔略〕さういふものだけを求めて居るのでは無かつたらうと思はれる〉と馬場孤蝶[14]は喝破する。

たしかに、お力は物欲に恬淡としていた。祝儀を〈蒔散ら〉すことが〈十八番〉のお力であった。

いったい、お力の〈目的〉とは何であったろうか。お力が〈天下を望む大伴の黒主とは私が事〉と〈茶利〉に託した〈目的〉とは何か―。

〈殘らず言ひまする〉と予告した〈今夜〉お力は〈複雜な三代の血の流れを結果としては貧困だけに持ってゆ〉く（和田芳恵）[15]話柄を〈いひさし〉のままだ。

ただここにお力の〈思ふ事〉の〈目的〉が貧困の問題と深くかかわると読み取ることはできよう。

私はそれを、助川徳是[16]の〈社会変革への志向〉説*に導かれてであるが、〈出世〉によって得た財を〈貧民救助〉**に宛てるという夢想ではなかったかと推量する。

＊助川徳是は、お力の物思いが社会変革への志向であり〈お力においては可能な社会変革の道は、金満家の嫖客に遭遇して、何らかの手段によってその財を私し、その財を以て、思う儘なる生を営むことでしかなかったのではないか〉という。これに対し、岡保生[17]は、〈しかし、おそらく彼女の心底ふかくひそんでいたであろう「思う儘なる生」も、それは衝動的なものであったにすぎず、具体的にその明確なプログラムは設計されていなかったのではなかろうか。お力はこういう稼業の女らしく、いわばその日その日の出まかせに日を送っているのであったし、第二章での描写に見られるごとく金銭に執着するという性も、お力にこれを見いだすことはできない〉と反論する。ただ〈出まかせ〉にみえながらもお力には一貫して〈思ふ事がある〉はずであり、祝儀を〈蒔散ら〉す描写は、お力の目的の私解にかえって好都合だ。

＊＊「花ごもり」に〈彼の田原殿が奥方は京の祇園の舞妓とかや、氏ははるかに劣りし人とか、通常普通の娘にて過ぎなば、前垂れ襷の縁をはなれず、井戸端に米やかしぐらん、勝手元に菜切庖丁や握るらん、さるを卑賤しき營業より昇りて、あの髭どのを少さき手の内に丸め奥方とさへ成り澄ませば、そしりは物のかげに隠れて名は公の席にも高く、田原夫人と並らべ書けるが、公侯伯子の誰夫人にも劣る事か、慈善會、音樂會、名は聞きながら見ることの難き人さへ有るに、幹事とかや何とかや、それは未だ少さし、事ある時は おほけなき御前にも出るとぞ〉とある〈慈善〉を考えてもよい。なお右文にみる〈玉の輿〉は〈卑賤しき營

業〉といっても〈舞妓〉の例であり、〈三味線ひけども藝者といふ名もなく、かん札うけねば女郎でもなし、此様な商買するもの丶中でも下の下の下といふ賤しい稼業〉（新筑摩書房版全集第二巻収録「にごりえ」未定稿 CIV34 の注122の書き込み）のお力との間隔は大きいに違いない。お力の場合に夢想というゆえんである。

〈貧民救助〉とは、「塵中日記今是集」明26・10・25にみる言葉である。安直な短絡を避けたいが、またお力の〈思ふ事〉に、「塵の中」明26・8・10〈七つといふとしより、草雙紙といふものを好みて、手まりやり羽子をなげうちてよみけるが、其中にも、一と好みけるは英雄豪傑の傳、任侠義人の行爲などの、そゞろ身にしむ樣に覺えて、凡て勇ましく花やかなるが嬉しかりき。かくて九つ斗の時よりは、我身の一生の、世の常にて終らむことなげかはしく、あはれ、くれ竹の一ふしぬけ出しがなとぞあけくれに願ひける。されども其ころの目には、世の中などいふもの見ゆべくもあらず。只雲をふみて天にとゞかむを願ふ樣成りき。〉とある〝一葉〟の義侠憧憬・出世願望*があぶり出されてくることも否みきれないので、付記しておく。

*引用文中〈九つ〉から〈願ひける〉までは、すでに蒲生芳郎[8]が引くところ。

本文にもどる。

> お前は出世を望むなと突然に朝之助に言はれて、ゑッと驚きし樣子に見えしが、私等が身にて望んだ處が味噌こしが落、何の玉の輿までは思ひがけませぬといふ、嘘をいふは人に依る始めから何も見知つて居るに隱すは野暮の沙汰ではないか、思ひ切つてやれ〳〵とあるに、あれ其やうなけしかけ詞はよして下され、何うで此樣な身でござんするにと打しをれて又もの言はず。

以前は〈言はれぬとい〉いはった〈履歴〉・素性を語るうち、お力には現実の自分が次第にみえてきたであろう。

折も折、お力の〈思ふ事〉の一面が、朝之助のことばによって形を与えられる。

現実と〈思ふ事〉との隔差が一挙に明確となって、お力は自分の現実を思い知る。

朝之助はなおも〈思ひ切つてやれ〳〵〉とお力を〈けしかけ〉る。しかしひとたびこの隔絶をみてしまったお力が、そんな〈詞〉に動かされるわけがない。

これまでお力の〈隱〉し持っていた夢は、〈秘密〉の一端が明かされたとたん、玉手箱の煙のように消えてしまった。あとにはたゞ〈玉の輿〉を〈望んだ處が味噌こしが落〉の〈此樣な身〉の一介の

酌婦であるお力が、退路を断たれて絶句しているのみ。

幼時の貧窮体験に通じる〈味噌こし〉の語が痛い。

> 今宵もいたく更けぬ、下坐敷の人はいつか歸りて表の雨戸をたてると言ふに、朝之助おどろきて歸り支度するを、お力は何うでも泊らするといふ、いつしか下駄をも藏させたれば、足を取られて幽靈ならぬ身の戸のすき間より出る事もなるまじとて今宵は此處に泊る事となりぬ、

この夜、お力が朝之助をひきとめて枕を共にするのも、*対嫖客の娼婦＝われに帰った、そのわびしさに堪え得なかったからであろう。

*〈そこ〔胸中の秘密〕まで自分を知ってくれる男の心がうれしくて〉という解釈（蒲生芳郎）[28]もあるけれど、これでは〈――打しをれて又もの言はず〉が生きてこない。

登場人物の去った舞台に、夜行巡査の靴音が高くひびいて、第六章の幕が下りる。

Ⅳ

『めさまし草』の「雲中語」で〈概論家〉[1]は〈第八章〔お力・源七の心中〕を以て直に第七章〔源七一家崩壊〕の後を承け草々局を収めたるは、權衡宜きを得ずして、讀者の忖度に任せたる區域の餘り廣すぎしこと爭ふべからず〉と指摘し、岡保生も〈〔第六章〕以下、お力のみについていえば、彼女は第七章では、ただ太吉のことばをとおして、「何処かの伯父さんと一緒に来て、（太吉に）菓子を買って」くれたことが知られるだけで、その時日も定かでない。そして、いきなり第八章の死が描かれる。とすると、第六章と第八章との間に、お力のなんらかの決意なり観念（諦念）なりが描かれていたほうが、話はわかりやすいにきまっている。もっとも、〔略〕無理心中説をとれば別だが。〉と述べている。[29]

お力の〈思ふ事〉の顚末に関する私解からは、その後のお力の内面劇を概略次のように〈忖度〉できようか。

お力の〈秘密〉が現実で阻害されている願望を胸中で満たす前記の夢想だったとすれば、その〈秘密〉の持続こそ〈無理にも商賣して居〉るお力を精神的に支えてきたはず。

その夢が跡方もなく消えた今、お力に〈酒氣が離れた〉ごとく〈坐敷は三昧堂のやうに〉一変漂白する。

第六章末のお力はすでに〝生ける屍〟だ。

草稿では第六章・第七章間に位置する「無題二十二」＝翌朝のお力の述懐に〈又もや一つ罪の數をそへぬ〉とある。〈罪〉はまず娼婦なるがゆえのそれであろう。

お力は、娼婦が罪作りな稼業である現実を直視する。

そして第七章。

お力が〈親切で〉源七の子供に買い与えた〈かすていら〉は、源七一家崩壊の直接的契機をなしていく。

〝同情がかえって仇〟となる。

私の前記の推測を追うならば、〈貧民救助〉を甘く夢想したお力の、志とはうらうえに源七を極貧に窮追していった現実の経過がこゝに集約・投射されているのをみる。

自責の念がお力の胸をえぐる。

しかも、お力は源七を破滅させただけでなく、お初を路頭に迷わせることにもなった。〈女子の身の寸燐（まつち）の箱はりして一人口過しがた〉き巷に。

前記したように、お力に小町が透かしてあるとすれば、お初の一原型は娼妓小町の遺児であり、二人に通底するものがある。お力がそのまゝお初に重なるわけではないが、お力がお初を窮地に追いつめたのは、自滅に近い。

お力の死への傾斜は、着々と加重されていったのである。

〔付記〕一葉の著作本文の引用は、（一箇所をのぞいて）昭和二八年より三一年にかけて刊行された旧筑摩書房版『一葉全集』に拠る。（ただし字体は厳密でない。ルビは簡略化）。現在刊行中の新版（既刊三巻）を駆使することができなかったのは専ら私の怠惰の所為である。とりあえず、小稿関係著作名称の新旧両版での対応を示す。

旧	新
無題五	作品26—A（無題その七）
無題三	作品38（無題その十二）V
無題二十二	にごりえ（未定稿）CIV32
無題二十三	にごりえ（未定稿）CIV40

先行参考文献のうち、とりわけ次記（年代順に排列した）のものに負うところが多く、番号を○印で囲んだものは本文中に引用させていただいた。記して謝意を表したい。

番号	署名	題名	年月日	掲載誌名（出版社）	巻号
①	露伴 緑雨 学海 鷗外 篁村 紅葉 思軒	雲中語	明30・3・31	めさまし草	一五
②	長谷川時雨 評釈	評釈 一葉小説全集〔註〕	昭13・8・15	（冨山房）	
3	久保田万太郎 脚註	樋口一葉全集〔註〕	16・7・18	（新世社）	二
④	馬場孤蝶	劇になった「濁り江」と「十三夜」	17・11・10	明治文壇の人々（三田文学出版部）	
⑤	山本健吉	小説に描かれた青春像(七)『にごりえ』のお力	29・6・1	文芸	二六
⑥	関良一	「にごりえ」考	29・7・10	文学	三七
⑦	藤井公明	一葉小説の文章 附章句語彙調査	31・6・20	（一葉全集 筑摩書房）	七

初出未確認。

⑧	次田潤〔註〕	評釈 一葉名作集〔註〕	32・4・20	（明治書院）	
⑨	塩田良平〔註〕	評解 たけくらべ・にごりえ〔註〕	33・5・	（山田書院）	
初版未見。33・4・1重版による。					
10	和田芳恵〔註〕	樋口一葉読本〔註〕	33・11・30	（学習研究社）	
⑪	塚田満江	丸木橋考―一葉小論	35・2・1	女子大国文	16
⑫	笹淵友一	『文學界』とその時代	35・3・25	（明治書院）	下
初版未見。36・7・1再版による。					
⑬	和田芳恵〔注・解説〕	岩波文庫32 にごりえ たけくらべ〔註・解説〕	36・9・5改	（岩波書店）	
改版初刷未見。47・6・10第55刷による。					
⑭	松坂俊夫	一葉小説の一側面	40・12・	山形県立米沢東高等学校研究紀要	3
初出未見。→『樋口一葉研究』（45・9・10、教育出版センター）による。					
15	〔旺文社文庫編集部註〕	旺文社文庫 たけくらべ（他）にごりえ・十三夜・大つごもり〔註〕	42・8・1	（旺文社）	
⑯	助川徳是	お力の物思い	43・3・31	日本近代文学会九州支部会報	6
⑰	松坂俊夫	〔にごりえ・樋口一葉〕草稿の検討	43・7・20	国文学	三9
18	岡田八千代校註	角川文庫 たけくらべ にごりえ〔註〕	43・7・30改	（角川書店）	
⑲	川淵芙美	『にごりえ』論	43・8・31	香椎潟	14
改版初刷未見。44・12・30第4版による。					
20	石丸久〔註〕	日本の文学5 樋口一葉 徳富蘆花 国木田独歩〔註〕	43・12・5	（中央公論社）	
初版未見。47・9・5第9版による。					
㉑	浜本春江	樋口一葉研究―「にごりえ」を中心にして―	44・7・25	名古屋大学国語国文学	24
22	和田芳恵解説注釈	日本近代文学大系八 樋口一葉集〔註〕	45・9・10	（角川書店）	
㉓	岡保生	お力の死―「にごりえ」ノートから―	45・11・1	学苑	371
24	山根賢吉編〔註〕	校注 一葉名作選〔註〕	46・3・30	（学友社）	
初版未見。49・1・30第5版による。					
㉕	前田愛	『にごりえ』の世界	46・6・30	立教大学日本文学	26
㉖	関良一校注	講談社文庫A64 たけくらべ・にごりえ・十三夜ほか二編〔註〕	47・1・15	（講談社）	
㉗	松下道夫	〔日清・日露戦後の文学について〕「にごりえ」覚え書き	47・8・1	国文学解釈と鑑賞	三10
㉘	蒲生芳郎	『にごりえ』の構造―作品読解の試み―	51・1・31	文芸研究	81
㉙	橋本威	『にごりえ』論序説	51・12・25	大阪教育大学附属高等学校池田校舎研究紀要	9